Oneself

時間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｏｎｅｓｅｌｆ

【Ｎコード】
Ｎ０９７８Ｚ

【作者名】
時間

【あらすじ】
幼い頃から今までの記憶が無い少年、静馬。
表向きはいつも笑っているが…裏向きは本当は誰にも言えないくらいの臆病。
そして、ある日、出会ってしまった。
※ＢＬ？要素はいるかもです。すみません。

Prologue

自分自身は何者なのかが分からない。
その恐怖心で自分に期待、しなくなった。
誰かが、誰かが僕の事を分かってくれる人が居たら、
僕はその人を信じるだろうか？…。
何も分からない…ただ僕は…人を信じる事も出来ない。

氷葉（ひょうば）　静馬（しずま）
中学３年生の男の子。
表＝明るくて元気で誰にでも優しい。
裏＝生意気のようで冷たくて臆病。
記憶喪失。幼い時の頃の記憶が無い。
表＝いつも友達といて、成績優秀でよく笑う。
裏＝他人を信じない、記憶がないせいの臆病さ。
本当の自分自身が不明。

上塚（うえづか）　栢（はく）
１８歳くらいの男の人。
明るいようで冷たい人でよく笑う。
静馬によく絡む。
とても、不思議な人。

#1 Encounter

自分自身が誰なのか。
自分自身はどこに居るのか。
それすらも分からない。
何も分からない。
ただ、笑っている。
無意識に、人を傷つけてしまう。
そんな自分がいやで…いやすぎて。
自分自身を分かってくれる人を探していた。

「静馬！今日、遊ぼうぜ！！」ニコッ
「あっ…ごめん。今日は用事があるんだ。」ニコッ
「そっか、じゃあまた今度遊ぼうぜ！」ニコッ
「うん！」ニコッ
少年の名前は『氷葉静馬（ひょうばしずま）』

「はぁ…雨だ…。」
今日の天気は雨だった。
「静馬、傘は？」
「無い。濡れて帰るからいいよ。」ニコッ

「あっだけど。」
「大丈夫！じゃあな」ニコッ
「うん！」ニコッ
静馬は雨の中を走って帰った。
早く逃げたかった。
あんなの僕の居場所じゃない。
「ハァ…ハァ…ハァ。」
雨の中を静馬は歩いていた。
僕の居場所なんか無い。
本当は分からない。自分がどこの誰なのか…。
何者なのかも、分からなくて怖くて…。

「……。」
静馬は道端を座り込んだ。
「…誰が僕の事を知ってるの？…。」
誰も居ないところで一人雨に打たれて座っていた。
「お前。」
「……。」
静馬に話しかけてくる一人のスーツを着た男。
「氷葉、静馬だな？」
「えっ…？」
カチッ！
「！？…。」
スーツを着た男は、静馬に銃を向ける。

「やっと、見つけた。死ね。」
「！？……。」

バキューンッ！！！！
「なッ！？…貴様…。」
スーツを着た男が倒れた。
「！？…。」
「大丈夫？静馬」ニコッ
「えっ？…。」

『静馬。』ニコッ

「…栢…。」
「覚えてる？逃げよう。」
「！？…。」

何で…僕はこいつの名前を知ってる？…。

グイッ！
「！？…。」
男は静馬の手を引っ張る。
「行こう。」
「！？…。」

そして、静馬は男と逃げた。

#2　RedBlood

「って…あんた誰！？」
「今は走って！！」
「はぁ！？…。」
「待て！！！！」
静馬と男に後ろには数人のスーツを来た男が追いかけてくる。

「ちょとごめん。」
フワッ
「うわぁ！？…ちょっ！！！」
静馬は男にお姫様抱っこをされる。
「…何するんだよ！！」
静馬は顔を真っ赤にして暴れる。
「いいから、いいから。つかまっててて！」
「！？…うわぁ！！！！」
男は軽々と屋上を飛び越えていた。

「…あんた！何者なんだ！？」
「…俺は…静馬の従者だよ」ニコッ
「はぁ！？…従者？…。」
「いいから、今は逃げるよ！」
「うわぁ？！…。」

僕はこんな奴知らない。

記憶に無い。

まぁ、無いのは当たり前だ。
僕には記憶が無いんだから。
「…栢…。」ボソッ

バキューンッ！
「！？…。」
突然銃声が鳴った。
その音に驚いて目を開ける静馬。
「何？…。」
「人間同士が殺しあってるんだよ。
今はこの世界はおかしいから。」
「！？…。赤…。」
「静馬？」

真っ赤な赤…真っ赤な血の色に染まる。
染まる…染まってしまう。

『静馬…ごめん。』

染まってしまった。真っ赤な赤に、真っ赤な血に。
「静馬？」
「…僕は…誰なのかがわからない。」

#3　Discovery

僕は誰だ？…。

誰だ、昔僕に手を差し伸べてくれた人は。

「静馬。行こう」ニコッ

あなたはいつも…僕に優しくしてくれる…。

それはどうして？…。

ズキッ！

「グッ！…。」

「静馬！」

静馬は頭に激しい激痛が走る。

「グッ…痛ッ…。」

「静馬…。」

静馬は視界が薄くなる

僕は昔の記憶を思い出しちゃ駄目なのか？…。

「……。」

「…！？…。」

男が静馬にキスをした。

「！？…。」

「ごめんね」ニコッ

「しておいて！笑ってるな！！！！」
静馬は顔を真っ赤にした。

最悪だ！僕のファーストキスが！！！！！！！！

バキューンッ！！！
「うわぁ！？撃って来た！？」
「大丈夫だよ。」
「静馬様！」
「静馬に何してんだ！！！！」
後ろから、誰かがスーツの男を襲い掛かった。
「！？…。」
「チッ…だからいやなんだよ。」
「静馬様に手を出さないでほしいよねぇ～」ニコッ
「へいへい。」

そして、静馬の目の前に来た人は。

”妖怪”だった。

「！？…妖狐…？」
「当たりです！静馬様！」ニコッ
「知ってて当たり前だろう？」
「えっ？…。」
静馬は唖然と半分に驚いていた。
何で…僕の名前を知ってる？…。

「やっぱ、覚えてないか。」
「それは言わない約束でしょうが！」
少女が少年を回し蹴りする。
「グヘッ！」
少年は痛そうな顔をしていた。

「あっ…初めまして？私は半妖狐です。えっと…鬼妖（きよう）と申します！」
ニコッ
「俺も、鬼妖（こいつ）と一緒で半妖狐。名は、脊妖（せよう）だ。」
ズキッ！
「痛ッ！…。」
「大丈夫ですか！？静馬様！」
「…あっ…うん。」

今日だけ何でこんなに激痛がはし……。

フラッ

「静馬！」
「静馬様！」

静馬達がいる所は空だった。
静馬はそのまま下に落ちて行った。

僕の過去はなんだ？…誰か僕を救ってはくれないのか？…。

フワッ

「！？…栢様！」

栢が静馬を受け止めた。

静馬は静かに眠っていた。

「…本当に変わらないな、静馬は。」ニコッ

「ＺＺＺＺＺ。」

僕を闇から救ってくれる人はいるのだろうか…？。

#4 House

誰だか、分からない。
自分自身を失ってしまって。
何も思い出せなくて。
苦しくて、辛くて、他人を見てるだけで寂しくてうらやましくて。
自分自身が初めて、無理をして孤独って分かったような気がしていた。

パチッ
静馬が目を覚ます。
「……。」
静馬は綺麗な白いベッドの上で寝ていた。
「…。」
辺りを見渡したが誰も居ない。
ベッドの隣にある小さな机に薔薇が入ってある花瓶が合った。

「……。」
静馬は立ち上がろうとする。
ガクッ！
「！？…。」
足が極度に震えていて、立ち上がることが出来なかった。

なんだ？…これ？どうして？…。

「静馬様！大丈夫ですか！？」
一人の可愛い少女が静馬を心配して駆け寄る。
「…あっ…って誰？」
「あっ、鬼妖です。人間の姿の」ニコッ
「あっ…そっか。」
「今日一日は足は動きません。」
「なっ！？」
「回復するまで、結構時間がかかります。今日はここで安静しておいてください。
それとも、ご家族が心配されますか？」
「！？…。」
静馬の動きがピタリッと止まった。

「…僕が家に居なくなったら…逆に喜ぶよ…皆。」
「えっ？…。」
ガラッ
「喰いもん。買って来たぞ。」
脅妖が人間の姿でお弁当を買って来た。
「脅妖、遅いです！」
「うっせな！こっちだって、こんななれない姿で買い物とかマジないぞ！」
脅妖が文句を言う。

「で！ここは誰の家なんだ？」
「ここは、静馬様と私達の、秘密基地ですよ！」ニコッ
「ふ～ん。こんな家なら僕ここで住んでもいいかもしれないなぁ～」
静馬はベッドに寝転がる。

僕が居ても、誰も心配しない。誰も気にしない。

「静馬。」
「！？…。」
「栢様？」
「栢さん！？」
「栢？…ん！？」
栢が静馬にキスをした。

「ぅ…いきなり何するんだよ！！」
「朝のキス？」ニコッ
「最悪！！！！！！」
静馬は顔を真っ赤にして、ちょっと半泣きな顔をした。

「まぁ、いいじゃない？」ニコッ
「…もう知るか！」

僕はこの人に勝てません。

#5　Room

「……。」

2日ぶりに家に帰ってきた。
どうして家に帰ってきたって…それは。

「はぁ！？いやだ！」
「どうしてだよ！本当に生意気だな！」
「何で、僕が一旦家に帰らないといけないの！？
ここに住む！！」
「いいから、一旦帰れ！！」

そして、荷物全部持って来いよといわれ、今に至る。

「…はぁ…。」
ガチャッ
静馬は家に入った。
鍵は開いていた。
なぜか静かだった。
そして、ロビングに行くと。

「！？…。」
「静馬！よかった！帰ってきてくれたのね！」ニコッ
「！？…。」
突然静馬の母が泣きながら静馬に抱きつく。
「母さん？…。」
「よかった！母さん心配したの。静馬が居なくなったらどうしよって想って。」

「いい加減にしろ！こんな汚いガキッに何！抱きついている！」
「！？…。」

誰？…

「静馬。新しいお父さんよ。前のお父さんはもう耐えられないって出てい行ったの」ニコッ

違う…。

バシッ！
「！？…。」
「静馬！大丈夫！？ちょっとあなた！何をするの！静馬がかわいそうでしょう！」
母は静馬をかばう。
父が静馬の頬を叩いた。
「こんな二重人格でうちの子かも分からないガキがうちの息子な訳ないだろう！」
「そんな事言わないでちょうだい！」
「なんだ！俺に逆らうのか！」
「……。」
両親の喧嘩が始まった。

やっぱり…僕は存在しちゃいけないんだ…。

静馬は両親が喧嘩してる内に部屋に戻って部屋の鍵を閉めた。
「あっ！静馬！開けて静馬！開けてちょうだい！」
母は居なくなった静馬を見て、部屋に戻ってドアを叩いて叫ぶ。
「……。」

「静馬！お父さんの事は気にしないで！今日はあなたの大好きな物作るから！」

聞きたくない！…僕はこんな所に戻りたいんじゃない…。

静馬は耳を手で塞いで目をつぶった。

何所にも無い…僕の居場所なんて…。

世界が滅びればいい。僕なんて存在しなくなればいい…。

ポタンッ

「……怖い…誰か…助けて…。」

静馬は顔を隠して、小さい声でつぶやいた。

フワッ

「！？…。」

「静馬は俺だけのそばに居ればいいよ。」

「…栢…。」

窓から栢が静馬に抱きついた。

「鬼妖も脅妖もいる所に帰ろう。」

「！？…。」

「何も、怖くないよ。静馬」ニコッ

「…栢…。」

そして、静馬はかばんにいろいろ用意を始める。

そして、用意は終わり。

母はまだドアを叩いていた。

「静馬！お願い！開けて！」
「母さん、ごめん。僕もうこの家には帰ってこないよ。」
「えっ！？…静馬！どういう…。」
「ごめん、母さん。サヨナラ。」
「静馬！。」
ガチャッ！
そして、ドアが開いた。
「静馬！」
「…ごめんね。母さん。だけど僕は生まれ変わらないといけないんだ。」ニコッ
「！？…静馬！」

そして、静馬は姿を消した。

#6 Time

『静馬！！！！！』

パチッ
静馬が目を覚ます。
「ん？…夢か…。」
静馬はベッドから立ち上がる。
そして、窓の近くに行くと。

「人間だ！」
バンッ！！
「…うっざ。」
静馬は銃で化け物を撃ち殺した。
窓には血が飛び散ったが、気にしなかった。

「ふわぁ～…2度寝でもするか。」
静馬は再びベッドに入る。

「Ｚｚｚｚ。」
静馬は静かに眠りに入った。

ガタンッ
そして、誰かが静馬の部屋に入ってくる。
「はぁ～…相変わらず、悪趣味な部屋だな。」
静馬に部屋には薔薇が一面に散らばっていた。
「…何しに来た？」
「おきてたのかよ。静馬。」
「わかる。僕も変わってるんだからな。」

「へいへい。で、今日の予定だが。」
「…ん？」
「日本に行くぞ。」
「はぁ～…分かった。」
静馬はベッドに座る。
脊妖は隣にある椅子に座る。
「失礼します。静馬様。おはようございます」ニコッ
「…おはよう。」
鬼妖が部屋に入ってくる。
「また、化け物がきたのですか？」
「…あぁ…うん。」
「大丈夫ですか？」
「別にたいしたことは無いよ。」
「そうですか…。」
「お前もさっさと用意しろよ、鬼妖。」
「何を？脊妖？」
「日本に行くぞ。」
「分かりました。用意してきます。」
脊妖と鬼妖は部屋から出て行った。

「はぁ…。」
静馬は服を着替える。
静馬の体には、蛇の模様をした物が体中に巻きついていた。
「…この呪いもいつに消えるのだろうな。」
トンットンッ
「あいてる。」
ガチャッ
「静馬。」
「何？」

栢が部屋に入ってくる。
「早く、用意しろよ。」
「もう済ませたよ。」
「そうか…。」
静馬は服を着て、血の窓を眺めていた。

「日本か。こんな世界で今の日本はどうなっているだろうな。」
「世界は今、化け物に侵略されそうだね。」ニコッ
「本当に変わらないな。栢は。」
「静馬も変わらないよ。3年前とは大違いだよ。」
「それを変わったって言うんだよ!」
静馬は栢に怒る。

「…3年か…僕が消えて3年後。日本はどうなっているだろうな。」

#7 Danger

今、世界は化け物たちに侵略されてきていた。
そして、化け物と対等に遣り合えるのが。
”神雫（かみのしずく）”という化け物退治専門の人達だけだった。

僕もその一人だけど…。
「……はぁ…。」
馬車に乗っていた。
「静馬様は私がお守りします！」
「別に、自分の身くらい自分で守れるだろう？」
「そうだな…。」
「ほら。」
静馬は馬車から薄暗い空を眺めていた。

僕はいまだに、記憶を失っている。
この3年。まったく記憶を取り戻していない。

「つきました。」
馬車が止まった。
「……。」
馬車を降りると。
「なんだこれ？…化け物共もグロイな。」
辺りは死体とボロボロになった家ばかりだった。
「…。」

「静馬、大丈夫かい？」
「栢、別に僕は何も…。」
「それならいいけど」ニコッ
「……。」
静馬は歩き始める。
誰とも会わない、誰も居ない。
ただ、死体と血と腐った匂いが広がっていた。
「…！？…。」
静馬はピタリと動きが止まった。
「静馬様？」
「……。」
静馬は目の前には、一つの血に染まった教会があった。
懐かしい…。
「あっ…。」
静馬は教会に向かって歩き出す。
ここは…。
『私は、待っているぞ。お前が来るのを。ずっと』
「…僕は…ここに…。」
ダンッ！

「静馬！」
教会の後ろから、化け物が出てくる。
そして、静馬に襲い掛かる。

「！？…。」
タッ！
「まったく、世話の焼ける。」
「！？…お前は…。」
突然、少女が静馬の目の前に来る。

「…時を越えて、今我に宿れ！…氷刃（ひょうは）！」
少女は刃を召喚した。
グサッ！！
「グギャァァァァ！！！！！」
少女は化け物を倒した。
「……。」
「静馬様！大丈夫ですか？」
鬼妖が静馬の心配をする。

そして、少女が静馬の目の前に来る。
バシッ！！
「！？…。」
「貴様は死ぬ気か！」
「静馬様！あなたね！」
「黙れ！」
「！？…。」
少女に静馬は頬を叩かれた。
「……。」
「たく、自分の身くらい自分で守れ！バカ者が！」
少女はそのまま消えてしまった。

「静馬？」
「……。」
フワッ
静馬は地面に座り込む。
「静馬様？」

死ぬ……こんな世界で生きるのなら…死にたい…。

「…栢様。」
栢が静馬をお姫様抱っこする。
「……。」
「たく、基地に戻るぞ。」
そして、馬車に乗る。

「…僕は…分からない…。」
「！？…。」

あの時と一緒。再びの再会と共に、世界は歪み壊れていっていた。

#8　SinWrong

あれから、静馬は寝込んでしまった。

部屋にこもりっぱなしで、ろくにご飯も食べていない。

ただ、部屋のベッドでずっと寝ていた。

トンットンッ

「失礼します。」

鬼妖が静馬の部屋に入ってくる。

「……。」

静馬はアイマスクをしていた。

分からない。分からなくて、気持ち悪い。

誰かが叫ぶ。誰かが僕を呼ぶ。

僕の名を誰かが哀れで罪悪感のように…。

気持ち悪い…聞きたくない。

『静馬。人間は狂ってる。だから、怖くなったら逃げていいよ』

「!?…。」

「静馬?大丈夫?」

「ハァ…ハァ…ハァ…。」
静馬はとても顔色が悪かった。
「静馬。どうかしたの？」
「悪い…夢…。」
「静馬。まだ、寝れる？」
「…気分が悪いから…水でも飲みに行く。」
「駄目だよ。」
栢が静馬を止める。
「…なんだ？別に僕が決めて…。」
「…。」
静馬は座り込む。
栢が静馬をベッドまで運ぶ。
「…栢、どういうつもりだ？」
「いいから寝てて。」ニコッ
「意味が分からんぞ。」
「いいから」ニコッ
「何…！？…。」
栢が静馬に暗示をかける。
「……。」
バタンッ
静馬は再び眠った。

「はぁ～…静馬がせっかく起きたのになぁ～、化け物のせいで。最悪だな。」

『静馬～』

やめてくれ！呼ばないでくれ！僕の名前を呼ぶな！

『静馬ぁ～』

呼ぶな！僕の名前じゃない名前を！…。

「！？…。」

「栢様！大丈夫ですか！？」

「静かに、静馬が起きるよ。」

「…ん？なんだ？」

ガタッ

「！？…静馬様！？」

「！？…栢…。」

「おはよう、静馬」ニコッ

栢は血だらけだった。

「大丈夫だよ。ただの返り血みたいな物だしね」ニコッ

「……ぅ…。」

「どうしたの？静馬？静馬らしくないよ？」

「…うっせ！…。」

静馬は栢に抱きついた。

そんな静馬を栢が優しく頭を撫でた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0978z/

Oneself

2011年12月10日20時54分発行